

P10-122

鎮痛消炎パップ剤の使用感の比較

置戸赤十字病院 薬剤部¹⁾、置戸赤十字病院 内科²⁾

○宇野 繁¹⁾、鈴木 一成¹⁾、藤澤 直樹¹⁾、
佐藤 則和²⁾、柏谷 朋²⁾、長谷川 岳尚²⁾

【目的】パップ剤はサリチル酸メチル含有刺激型とNSAIDs含有経皮吸収型に大別され多くの製品が発売されているが、使用感に差があることが伺える。今回、採用変更を前提として使用感の良い製品を探るべく比較検討を行ったので報告する。

【方法】インドメタシン (IM) 含有製品 [A、B]、フルルビプロフェン (FP) 含有製品 [C、D]、フェルピナク (FK) 含有製品 [E、F]、サリチル酸メチル (SM) 含有製品 [G] の冷感タイプと、FP含有製品 [H]、FK含有製品 [I]、SM含有製品 [J] の温感タイプの計10製品を対象とした。比較項目は貼り易さ、臭いの好感度、冷却感・温感、粘着性、フィット感と、刺激感・掻痒感、汗ばみ・むれ、剥離後の湿疹・痒みなどの発生頻度である。当院ボランティア (男性13名、女性9名、平均年齢34.9歳) を被験者とし、就寝前2時間から起床時まで膝に貼付し10段階で評価し集計した。

【結果】貼り易さはB、C、D、Eの順であり、臭いの好感度はF、I、B、Aの順であった。冷却感はG、B、D、Cの順に強かった。粘着性とフィット感には相関性がみられた。刺激感はSMの温感タイプが大きく、IM、FP含有製品の順であった。汗ばみ・むれ、剥離後の湿疹・痒みの発生頻度は少なかった。全体的な貼付感はB、C、A、Dの順であった。

【考察】近年の貼付剤は、ライナーや支持体がより改良され、扱い易さ、貼り易さは向上しており、伸縮性があり皮膚へのストレスは少なく、通気性が良いために副作用の発生頻度は少ない。貼付感は、強すぎなく弱すぎない適度な芳香を有し、冷却感があり粘着性とフィット感の良い製品の評価が高かった。これらの結果は、採用変更を検討する際の基礎データとして有用であると考えている。

P10-124

脳梗塞におけるホルター心電図の有用性について

小川赤十字病院 検査部¹⁾、小川赤十字病院 内科²⁾、
小川赤十字病院 脳神経外科³⁾、小川赤十字病院 院長⁴⁾

○北 奈緒美¹⁾、清水 聡²⁾、吉澤 秀彦³⁾、
宮川 淳子¹⁾、増淵 啓志¹⁾、根本 潤一¹⁾、
斎藤 由利子¹⁾、前川 傑¹⁾、浅野 孝雄⁴⁾

【目的】脳梗塞の原因にはアテローム性、ラクナ性、心原性があり、そのうち心原性脳塞栓症は心房細動を主とした不整脈が原因と言われている為、当院脳神経外科では脳梗塞で入院し軽快した患者に対し全例ホルター心電図を施行している。今回その結果を検討し報告する。

【対象および方法】2006年1月から2009年3月まで3年間、脳神経外科に脳梗塞で入院した440人 (平均年齢男性80歳、女性77歳) についてホルター心電図を施行した。その結果を調律、心拍数、3秒以上のポーズについて解析し、ポーズの患者にはペースメーカーの必要性も調査した。

【結果】1. 脳梗塞患者の20%に心房細動、4%に発作性心房細動が認められた。2. 3秒以上の心停止が19例に認められ、9例の患者にペースメーカー手術が施行された。3. 最大心拍数は、洞調律に対し、心房細動・発作性心房細動は頻脈であった。4. 最小心拍数および平均心拍数は、洞調律・発作性心房細動に対し、心房細動は頻脈であった。

【考察】1. 脳梗塞患者の約25%に心房細動・発作性心房細動が認められ、心原性脳塞栓症が高率であると推測された。ホルター心電図を施行することで脳梗塞の原因が心原性であると診断が付き、治療方針の決定に重要な役割を果たしていると考えられる。2. ペースメーカーが必要な高度の徐脈となる心房細動が9例 (約2%) 認められた。早期発見によりペースメーカー植え込みまでの迅速な対応が出来たと考えられる。3. 脳梗塞に伴う心房細動は頻脈が認められた。

【結語】脳梗塞において、ホルター心電図は有用であった。

P10-123

化学療法施行時におけるステロイド投与量の調節による制吐作用の検証

大分赤十字病院 薬剤部

○宗 広樹、永野 俊玲、久枝 真一郎、佐藤 雄介、
朝倉 俊治

【目的】化学療法 (抗癌剤投与) を施行する際に起こりうる有害事象のうち、悪心・嘔吐は一般的に高頻度に認められる症状である。悪心・嘔吐の症状を抑制するためには、ステロイドの投与が有効であるとされている。我々は前回の第45回日本赤十字社医学会総会において、NCCNまたはASCOのガイドラインをもとに、当院におけるステロイド投与量の適正化に関する検討について報告を行なっている。今回我々は、ステロイド投与量の調節による制吐作用の検証を行なった。

【方法】外科と呼吸器科領域において使用される化学療法のレジメンのうち、ステロイドの初回投与量が増量となったドキソルビシンとシクロフォスファミドの併用療法 (AC療法) と、ゲムシタピンとシスプラチンの併用療法 (GEM+CDDP療法) を施行した患者について、ステロイドの増量前と増量後の食事摂取量を比較した。また、ステロイドの増量による有害事象の有無についても調査した。

【結果】食事摂取量は、ステロイドの増量前において両化学療法を施行後2日目に顕著に減少した (約28%) が、ステロイドの増量後は顕著な減少は認められなかった。また、今回調査を行なった患者に関しては、ステロイドの増量によると思われる有害事象は特に認められなかった。

【考察】今回、化学療法の施行時におけるステロイド投与量を増量した結果、食事摂取量が顕著に減少しなかったことから、ステロイドの増量により悪心・嘔吐の症状が抑制されたことが示唆された。また、有害事象が認められなかったことから、ステロイド投与量の適正化が安全に行なわれたことが示された。以上の結果から、当院におけるステロイド投与量の適正化が有効かつ安全な化学療法施行に貢献していることが示された。

P10-125

発症当初、EIEEが疑われたWest症候群 (variant) の1症例について

山田赤十字病院 臨床検査部

○森本 一至、市村 恵、戸上 奈央、辻 寿美、
井上 正和

【はじめに】乳児てんかん代表的なものとして、EIEEやEME、West症候群があげられる。今回、われわれは発症時に頸部・両上肢 tonic spasms のシリーズ形成を認め、初回脳波検査にて suppression-burst 様 (PSD様含む) を呈した、West症候群 (variant) の1症例について報告する。

【臨床経過】在胎41週4日、出生体重3096g、周産期は特に問題なし。てんかんの家族歴 (-)。生後2ヵ月頃 (2009年3月18日頃) より頸部・両上肢の tonic spasms が出現する。spasmsは数秒毎に繰り返すシリーズ形成を認め、約4-5分間持続する。同様のシリーズが4-5回/日に認められた。2009年3月28日頃より spasms が目立つようになったため、3月30日紹介医を受診、3月31日当院小児科に精査加療目的のため同日入院となる。

【理学的所見】身長59cm、体重5.36kg、体温37.6℃、意識清明、発作時以外は表情良好である。大泉門は平坦・軟であり、瞳孔左右同大、眼振 (-)、追視良好、咽頭の発赤やリンパ節の腫脹、肺ラ音、心雑音、全て (-)。腹部はやや膨満・軟、肝辺縁触知、脾腫 (-)。四肢麻痺 (-)、筋緊張良好で髄膜刺激徴候 (-)、皮膚発疹 (-)。

【脳波検査】2009年3月~2010年3月までに合計9回、脳波検査施行した。初回検査では、覚醒時及び睡眠時にて明らかな hypersarrhythmia とは言いがたく、suppression-burst 様 (PSD様含む) の出現を認めた。その後、徐々に発作波の軽減を認め、2010年3月の検査にて bi-posterior half dominant spike & wave (or burst)、睡眠時には diffuse irregular spike & wave burst が出現し、波形変容を認めた。

【頭部MRI検査】髄鞘化の進展度は月齢相応であり、てんかん原性病変などは指摘できない。

【まとめ】1. 乳児てんかんの鑑別診断は、非常に難しいものであることを痛感し、脳波検査はあくまでも補助診断であることを再認識するのに良い機会となった。